



生物多様性 - 庭園での希少種保全の取り組み -



植彌加藤造園株式会社 自然文化サービス

弊社が御用達を務める東本願寺の飛び地境内地「渉成園」では、2005年にミズアオイ開花の記録が認められますが、それ以降は記録が残っていませんでした。

2018年に13年ぶりに弊社の職人が確認、その後京都大学の瀬戸口浩彰教授によりミズアオイと同定されました。

水葵ーミズアオイー



絶滅寸前種
Critically Endangered



京都府レッドデータブック 2015
RED DATA BOOK OF KYOTO PREFECTURE 2015

学名：Monochoria korsakowii
ミズアオイ科ミズアオイ属

水田や湿地にはえる一年草の抽水植物。
多数の美しい青紫色の花をつけます。
万葉時代から主要な野菜として親しまれていましたが、近年河川・池などの開発、
農薬の散布などで姿を消し、希少種として扱われています。

【13年ぶりの開花確認の経緯】

渉成園を管理している弊社職人が、印月池の畔で見慣れない青い花を確認した為、瀬戸口教授に調査を依頼し、ミズアオイと同定されました。

この情報は [KBS 京都フェイスニュース] [京都新聞] [朝日新聞] [読売新聞] で報道されました。



結実後は袋をかけて種子の採取を行い、
発芽させる為に春化処理*を行いました。

*人為的に寒さや湿度等の条件を満たし、発芽を促す処理のこと

【育成の記録】

発芽



2019.6.19

播種後2週間程度で水中で発芽し、細い糸状の子葉が出てきます。

水中葉



2019.7.3

水中で葉が育ってきます。水深は1~2cmが生育に適しています。

気中葉



2019.7.13

しっかりした茎と細長い葉が生え、一部の葉が水上に出てきます。

成長期



2019.8.1

ミズアオイの特徴であるハート型の葉が出て始めます。

開花



2019.9.10

一日花ですが、下から上に次々と咲く為、長い期間花を楽しめます。

結実



2019.9.20

結実後は、種子に袋をかけて、来年に向けて種子採取を行います。

【名勝渉成園保存修理事業について】

「名勝」とはすぐれた国土美の有様を様々なかたちで表現し、風致景観の緩衝を通じてその価値を発揮する記念物で、文化財保護法により指定されています。現在、渉成園内の建造物や庭園の傷みが進行するなど、本格的な修理が必要となっており、2014年（平成26年）度より保存修理事業を開始、10年間の計画で整備を進めており、植彌加藤造園も施工に関わらせていただいております。

今回何故13年ぶりにミズアオイが確認されたのか？「名勝渉成園保存修理事業」の一環で印月池の水を抜き、耕耘したことで攪乱が起き13年間眠っていたミズアオイの種が発芽した可能性が高いと推測しています。



耕耘作業の様子

ミズアオイ以外にも、弊社の管理庭園ではマツバラン（京都府絶滅寸前種）ギンラン（京都府絶滅危惧種）等の希少種保全に取り組んでいます。



マツバラン



ギンラン

皆さまへのメッセージ

日本庭園は、職人が手入れを行うことで、自然環境が維持され、多様ないきものの「すみか」としての役割を果たしています。庭園を訪問された際は、その造形美を鑑賞いただくとともに、お庭を形成する大切な存在である、いきものたちの息吹を感じていただければ幸いです。

景色を庭師が伝える 渉成園の魅力



庭園ガイドによる普及啓発活動

渉成園は、約一万六六百坪の広さを有し、国の名勝に指定されています。

この広大な庭園を維持・管理していくには、専門的な知識と技術はもちろんのこと、

庭園に対する情熱や、長年にわたる知見の蓄積もまた重要になってきます。

そうした知識、技術と情熱をもって、長年渉成園の維持・管理に尽力してこられたの

が、「植彌加藤造園株式会社」の皆さんです。このたび、その植彌加藤造園さんから、

日本庭園の魅力と渉成園の特色についてご寄稿いただきました。



松の剪定（葉むしり）の様子

私たち植彌加藤造園は、真宗本廟（東本願寺）の飛地境内地である渉成園のお庭を日々お手入れさせていただいております。そんな庭師の目線から、日本庭園の魅力、そして渉成園の特色をお話したいと思います。

1 お庭をはぐくむということ

日本庭園には、完成というものではありません。お庭ができた時を想像してみてください。そこにはすごい感動がありますが、それは一瞬のこと。お庭ができた時、それはお庭の完成ではなく、誕生に過ぎません。

時を経たお庭には、新しいお庭にはない苔むした岩や、長年雨に打たれた石燈籠の醸し出す美があります。またそこに価値を見出すことは日本庭園の特徴ともいえます。営々と長い時間をかけてはぐくまれ続けることで日本庭園らしさが増すのです。そんな人の人生をも超える長い間、どうやって一つの庭園をその庭園らしさを失わずに守っていくことができるのでしょうか。ふと考えると不思議です。

この渉成園も約360年もの間、京都の市中の一等地にありながら奇跡的に残され、はぐくまれてきました。一体どのようにして、それが可能だったのでしょうか？

庭をはぐくむために必要なものが3つ

2 渉成園の育成管理

それでは、渉成園のアイデンティティとは何でしょう。

渉成園は国の名勝に指定されていますので、その指定理由がアイデンティティに当たると考えてよいでしょう。昭和11年の指定理由には「池畔ニ縮遠亭漱枕居、傍花園等茶湯関係ノ建築ヲ配置シタル外池ノ北岸ヨリ中島ニ架シタル回棹廊ノ如キ何レモ江戸時代初期庭園ノ特色顯著ナルモノト云フヲ得ベシ」（抜粋）と書かれています。

渉成園は、江戸時代を通じて東本願寺と徳川家との強い結びつきの中で、歴代宗主の隠棲の地として、また文化人が集う交流の場として利用されてきました。そのため、指定理由にあるように、庭園内には要所にお茶の文化に関する建築が配され、当時の情景を今に伝える庭園として名勝指定されています。

例えば迎賓施設として花ひらいた文化文政時代には、漢学者頼山陽が「渉成園記」（文政10年・1827）を残し、庭園内13ヶ所の名所である「渉成園十三景」をめぐり景色を楽しんだことが記されています。その楽しみ方は当時の文

あります。それは「庭のアイデンティティ（独自性）」、「庭をはぐくむ技術」、「庭に価値を見出す人々」です。

「庭のアイデンティティ（独自性）」は、例えばこの渉成園でいえば、東本願寺が真宗の教えに基づいて行った庭園内の配置や、歴代の使用者が持ち込んだ茶の湯の要素や歌の要素などです。それはこの庭の、この庭らしさともいえるもので、はぐくむべき価値の根幹となるものです。

「庭をはぐくむ技術」は、アイデンティティを実現するために意図した通りに樹木の剪定をしたり、適切な掃除をしたり、また季節や時代に応じて演出をしていく庭園管理の伝統的な技術のことです。

最後に「庭に価値を見出す人々」です。これは現在このガイドブックを手にとっているあなたも、そのお一人です。古い庭を大切にしたい、またその価値を守っていきたいと思う人々が現在にいれば、どんなに技術や資金があっても、庭は存在意義を見出されずに消えて無くなってしまいます。それは、渉成園のように国の名勝に指定され、文化財保護法で守られている庭園に限らず、すべての庭園に言えることなのだと思います。

この渉成園は、これら3つの要素が満たされ続けてきたために、現在までその姿を残すことができています。

人思想や煎茶の文化が反映されたもので、印月池南西端の漱枕居で待つ客人に臥龍堂の鐘を鳴らしてお茶の準備が整ったことを知らせるから、舟で印月池をめぐり縮遠亭に向かう趣向などが読み取れます。

庭師は、このような渉成園の特徴、アイデンティティを意識して、その特徴を基軸に庭園をはぐくんでいます。それぞれの建築がその場所であり、いかに使用されていたのかを想定しながら周りの景色を時間をかけてはぐくんでいます。ここは点前の前の時間、待合の時を過ごした場所か、それとも歌を詠み景色を広く臨んだ場所か。そうならばこのツツジの刈り込みはどの程度の高さが望ましいのか、中島の石組みはどう植栽と関係するのがよろしいのか等など、建築と庭園の織りなす景色が常にバランス良く構成されるような仕事をしています。

このようなはぐくみができるのは、渉成園を大切に守ってきた所有者に加え、来園者の皆さまや国として名勝を保護しようという社会の動きがあったことです。

今後とも、渉成園の価値を未来にはぐくんでいけるよう、日々邁進してまいります。

植彌加藤造園

創業嘉永元年（1848）。東本願寺 渉成園、南禅寺、智積院、清水寺、無鄰菴、對龍山荘など文化財に指定された名勝庭園の育成管理を数多く手がける。近年では伝統に裏打ちされたモダンなデザインの作庭を国内外で行う。指定管理者として「庭に集い、庭をはぐくむ」をキャッチフレーズに総合的に日本庭園の魅力を伝える運営も行っている。

